

【取組分野・活動実績シート】		
1. 基本情報		
大学名・学部名・学科名	東洋大学・国際学部・国際地域学科	
研究室 代表者名	沼尾 波子	
研究室代表者の専門分野	財政学・地方財政論	
研究室の学生数	15名	
活動可能エリア	応相談	
関連ホームページ	名称	URL
	東洋大学国際学部国際地域学科	https://sites.google.com/toyo.jp/grs/home
	静岡県富士市ふらりばブログ	https://furariba.fuicity.jp/?p=440
2. 地域課題解決に向けた取組分野		
観光	()	
移住・定住・関係人口	()	
農林水産業	()	
起業支援	()	
まちなか再生	()	
集落再生	()	
環境	()	
● その他	(地域の現状ならびに地域づくりに関する社会経済課題について、毎年度テーマを決めて調査研究を行っている。)	
3. 活動実績		
【活動実績①】 地域課題を多主体・多分野から調査した例 (1)活動地 :静岡県富士市 (2)活動内容:2025年度、富士市をフィールドに、「農業」「多文化共生」「観光」「公共交通」の4テーマに分かれて地域調査を実施した。4日間の現地調査では、市役所各課へのヒアリングに加え、農業者、漁業協同組合、製紙会社、国際交流ラウンジ、日本語学校、地区まちづくり協議会などを訪問。新富士駅では交通実態の調査も行った。行政だけでなく、地域団体、企業、外国人住民等の多様な主体から話を聞き、現場で地域課題を捉え、その背景や主体間の関係を分析する調査研究を進めた。 (3)活動による成果:地域の現状や課題を「外からの視点」から検討する機会となった。テーマごとに行政、企業、地域団体、外国人住民等への聞き取りを重ねることで、地域の中でどの主体がどのような役割を担い、どこに連携の可能性や課題があるのかを整理した。学生が現場を訪ねて話を聞くことを通じて、地域の担い手が自らの活動や地域の魅力を言語化し、見つめ直す機会ともなった。調査成果は論文や報告として取りまとめ、関係者に送付した。自治体にとっては、大学に調査を「委託」するのではなく、学生と地域の多様な主体との対話を通じて、地域の課題の発見、言語化や関係人口の増加に資すると考えられる。		
【活動実績②】 地域を訪問し、交流やインタビューを通じて、地域づくりの取り組みに参加した例 (1)活動地 :北海道東川町 (2)活動内容:2024年度、北海道東川町をフィールドとして、人口減少下にありながら人口を維持し、国内外から人を呼び込んできた地域づくりについて調査を行った。「写真の町」を核とした文化政策、景観や地域資源の活用、移住・定住、公立日本語学校を通じた外国人留学生の受入れ、多文化共生、地域の居場所づくりなどを対象に、行政や地域関係者への聞き取りと現地調査を実施。個別事業の成果だけでなく、人と人とのつながりや地域への愛着など、数値だけでは把握しにくい地域づくりの価値にも着目して検討した。 (3)活動による成果:東川町での調査を通じ、「写真」「文化」「景観」「教育」「国際交流」など、一見異なる政策がどのようにつながり、町全体の価値を形成しているのかを検討した。参加者のなかには、卒業論文のテーマを設定し、翌年度役場でインターンシップを行いながら、更なる課題の検討を行った例もある。移住・定住、地場産業、教育、多文化共生について、町の取り組みを学ばせていただくとともに、地域の方々との交流を深める機会にもなった。先進的な町の取組を学ぶことだけでなく、地域では当たり前になっている資源や取組を学生が問い直し、その意味を言語化・可視化する機会を設けた。地域を観察したことから生まれた疑問や提言を地元と共有するとともに、地元の人たちの考え方や感じ方についてもお話を聞くことで、交流を重ねることができた。自治体の様々な取り組みを外部の視点から振り返り、地域づくりの理念や各施策のつながりを再確認する機会となると考えられる。		
【活動実績③】 継続的に地域に入り、交流と実践につなげる取り組みを地元とともに行った例 (1)活動地 :福島県本宮市 (2)活動内容:2006～2010年度に、農業や商業、観光、食育、都市農村交流などをテーマとした継続的な調査研究を実施した。学生は春から秋にかけて複数回地域を訪れ、田植えや稲刈り、畑作物の栽培・収穫、農家民泊などを体験するとともに、農家や直売所への聞き取り、駅前商店街や小・中・高校生へのアンケート、一店逸品や飲食店街の調査などを実施した。調査結果を分析して地域活性化策を検討し、成果を市や地域関係者に報告するとともに、大学祭では本宮市の農産物の販売・PRにも取り組んだ。東日本大震災・福島第一原発事故を機に学生の現地調査ができなくなり、東京での交流の機会を持った。 (3)活動による成果:本宮市との連携は、学生が一度地域を訪問して提案するだけでなく、田植えから収穫まで年間を通して繰り返し地域に入り、農家や商店、市民との関係を築きながら調査を深めた点に特徴がある。農業体験、民泊、聞き取り、アンケートを組み合わせることで、学生は地域の暮らしや産業を具体的に理解し、その成果を地域活性化策として還元した。一方、地域側にも変化が生まれ、農林水産省の事例資料では、学生との交流を契機としてグリーン・ツーリズムへの理解が進み、農家民宿に取り組むための協議会が設置されたことや、学生を受け入れる環境が形成されたことが成果として挙げられている。また、学生が大学祭で自ら関わった農産物・加工品を販売し、本宮市をPRするなど、地域外での情報発信にもつながった。大学と地域との継続的な交流が都市農村交流を生み出した。		
4. 研究室卒業生の地方での活動状況		
・地方自治体の職員として、Iターン・Jターンで就職し、地域振興、産業振興、福祉、まちづくり等の行政分野で活躍する例がある。 ・大学卒業後も、ゼミ活動や現地調査で関わった地域との交流やネットワークを継続する例がある。		
5. 希望する活動内容		
自治体や地元の方々と一緒に「地域を知る」ということをやってみてはどうだろうか。ある社会課題について、担当部署と学生が一体となって、様々なステイクホルダーへの聞き取りを行うことで、認識の違いを確認したり、情報の共有を図ることを通じて、課題の整理や新たな取り組みについての検討を行う機会を持つ。地域の課題や魅力について写真や動画を用いて確認する試みもある。		